

極めて重大な神の宣言

ジャヤラクシュミー・ゴーピーナート教授は、サティヤ・サイ大学アナンタプル校（女子大学）の学寮長であり、英文学科の学部長でもあります。1940年代末にバガヴァンの元に来た彼女は、サイ大学アナンタプル校の講師であるラジェーシュワリー・パテル博士によるラジオ・サイ・グローバル・ハーモニーのインタビューの中でバガヴァンの神性体験の数々を語りました。

サイ ラム、ジャヤラクシュミー・ゴーピーナート教授。ようこそ、ラジオ・サイ・グローバル・ハーモニーにお越しくださいました。あなたはサイ大学アナンタプル校の学寮長であり、英文学科の学部長でもあります。でもそれ以上に重要なのは、あなたがバガヴァンの最も古い帰依者のお一人であることです。思い出の小道をたどり、番組のリスナーたちに何か初期のころのお話を聞かせていただけますか？ お幾つの時にバガヴァンの元に来られたのですか？ その当時、バガヴァンはお幾つでしたか？

ありがとう、ラジェーシュワリーさん。私がバガヴァンの蓮華の御足の元に来たのは十代の初期のころでした。おそらく1947年頃で、バガヴァンは21歳くらいだったと思います。

神との運命の出会いはいそれ以前から感じておられましたか、それとも予期せぬ形で起こったのですか？ 何があなたをバガヴァンの元へ連れてきたのでしょうか？

そうですね、それを単なる偶然と呼ぶことはできません。神のご計画によるものであったに違いありません。私の父は、退職する前にベンガルール（バンガロール）に定住しました。当時、私はまだ学生で両親と一緒に住んでいました。父は毎日散歩に出かけました。ある日、父はバガヴァン・ババについて教えてくれた人に出会ったのです。その人は、コーヒー農園の有力者であったサカンマ夫人の家に住んでいました。私の父はたちまち興味を抱き、ババ様に会いたいと考えて、住所を尋ねました。そして、父と母と私はバ



（ジャヤラクシュミー・ゴーピーナート教授）

ガヴァンの初めてのダルシャンを受けるために、サカンマ夫人の家を訪れたのです。

あなたは50年代と60年代にプラシャーンティ・ニラヤムを訪れたことがありだったに違いありません。当時のプッタパルティはどのような様子でしたか？

私たちは旧マンディール（寺院）があった時代に来ました。旧マンディールは、でこぼこの石で作られた非常に小さな建物で、バガヴァンのお住まいそのものはまったく羨望に値するようなものではありませんでした。辺り一帯が荒野でした。お決まりの日課など何もありませんでした。毎日が新しく、予測不可能でした。当時はスップラバータム（朝の祈り）のようなものは何もありません。私たちはほんの一握りの帰依者であり、とても小さな集団だったのです。

午前5時ごろに私たち全員が起床し、ババ様はお部屋から出てこられました。当時はダルシャンのようなものもなかったのです。ババ様は一日中ずっと私たちの間を歩いてくださいました。私たちはただ立って、うっとりとしてババ様を眺めていたものです。ババ様は私たちと共に遊んでくださり、バジャンの時は共に歌ってくださいました。何度も一緒に歌ってくださいましたよ。祭壇は演壇の上であり、誰でもそこへ上がって掃除をしたり片付けたりすることができました。旧マンディールには、神と神の帰依者たちの間に個人的な関係があるだけだったのです。それは完全な恍惚の境地でした。

ある時、母はデリーへ行かなければならなくなりました。私の二番目の姉が出産するためです。父と私だけが家に残りました。バガヴァンに完全に帰依していた父は、「さあ、プッタパルティへ行こう」と言いました。私は大喜びし、私たちはすぐに出発しました。

プッタパルティに到着すると、ババ様はいつものようにポルチコ（玄関先の柱廊）に立っておられました。ババ様は私たちを中へ連れて行き、祭壇の前で立ち止まられました。当然、父と私も立ち止まりました。ババ様は私をごらんになり、「歌いなさい」とおっしゃいました。もちろん人前で歌うのは気が引けましたが、ババ様は私を励まして、もう一度「歌いなさい」とおっしゃいました。私は、ババ様が私の歌えるある曲をお好きなことを知っていました。そこで、私はその曲を歌い始めました。歌いながらびっくり仰天しました！他にも何人かそこにいたのですが、みんな驚嘆していました。シルディ サイ ババとサティヤ サイ ババの写真の周りに掛けられたガーランド（花輪）が、大型サイズの全身写真と同じ長さのそのガーランドが、ぶらぶらと揺れ始めたので



す。最初にシルディ サイ ババの写真のガーランドが音楽の拍子に合わせてゆっくりと揺れ始め、どんどん速度が速くなり、揺れは非常に強くなって、しかもガーランドが切れて、花は全部落ちてしまったのです。歌っていた間、驚きのあまり私の髪は逆立ちました。ババ様はただ意味ありげに私を見つめて、「他の歌を歌いなさい」とおっしゃいました。私はミーラ バーイ（クリシュナ神の熱烈な帰依者）の歌を歌いました。すると今度はサティヤ サイ ババの写真に掛けられたガーランドが揺れ始めました。その揺れはしだいに勢いを増して、遂にこのガーランドも切れて、花が全部落ちてしまいました。ババ様は

再び私を意味ありげに見つめられました。もう歌うのを止めたかったのですが、また歌うようにおっしゃるので、三曲目を歌いました。その時、シルディ ババの銀のご神像に掛けられていたガーランドが落下しました。

その時は揺れなかったのですか？

ええ、その時はただ落下しただけです。直感的にババ様はとても嬉しいのだとわかり、私に関して言えば、もう天に昇るほどの喜びを感じていました。

当時はまだ新マンディールはなかったので、時おりスワミのおじい様であるシュリ・コンダマ・ラージュが旧マンディールに来られるのを見かけたものでした。当時、コンダマ・ラージュ様は 105 歳くらいでした。背が高く、痩せていらっしやいました。それほどのご高齢であるにもかかわらず、強靱な人格をお持ちの方でした。コンダマ・ラージュ様は杖を手に持たれ、誰かが祭壇のある外の囲いに置かれた椅子に座れるよう手助けしていました。そこでコンダマ・ラージュ様は座って神聖な孫のダルシャンを待っておられたのです。スワミはおじい様に会うために、急いで部屋から出て駆けつけて来られました。コンダマ・ラージュ様は立ち上がり、ババ



様のそばへ行って彼の手を取り、本当に嬉しそうにババ様を抱擁されていました。それは素晴らしい光景でした。お二人の間には、紛れもなく神聖な絆があったのです。



当時、ダシャラー祭やご降誕祭の期間中は、花で飾り付けたパランキーン〔神輿〕にスワミをお乗せして行進したものでした。一度、パランキーンが行進が旧マンディールまで戻り、神輿が地面に置かれたとき、スワミは神輿から下りて、ご自分のローブを揺すられました。私はその光景を目撃していました。スワミのローブからは、ヴィブーティ、ヴィブーティ、ヴィブーティがあふれ出しました。それは粉状になってこぼれ落ち、少し離れた場所まで広がったため、帰依者たちはその神聖灰をかき集め始めました。私はスワミの額にヴィブーティの厚い層が形成されるのを見ました。それはスワミの額に集まり、粉状の塊になって落ちました。スワミは帰依者たちが捧げた花の花びらをもぎ取って、群集に向かって両手で投げられました。それらの花びらは、空中でメダルに変わりました。皆がとても興奮していました。私の母は、意義深いことを証明したそのメダルの一つを手に入れました。私の父はケーシャヴ・ヴィッタラという名前で、ヴィッタラ・ラーオと呼ばれていたのですが、母が受け取ったそのメダルの表面にはバガヴァンの肖像が、裏面にはパーンドウランガ・ヴィッタラ神の肖像が描かれていたのです。一つひとつのメダルの神々の肖像は、すべて異なっていました。

多くの帰依者たちは、粗い石で作られた旧マンディールでは不十分だと感じていました。ババ様のお部屋は小さく、居間と寝室の間の廊下もありませんでした。ババ様にはまったくプライバシーというものがなかったのです。トイレに行く時でさえ、帰依者たちが立って見張っていました。そこで帰依者たちはバガヴァンのために広いマンディールを建てたいと考えました。こうして、新マンディールの建設が始まりました。

そのプロジェクトは大いなる熱意をもって始められました。しかし不安を抱く人々もいました。その人たちは、このマンディールは地面から1フィート〔約30センチ〕以上の高さにはならないだろうと言いました。彼らはそれほど傲慢

だったのです。そして、スワミは極めて重大な宣言をなさいました。スワミはそこに立って、突然、厳粛になりました。スワミは遊び友達になる時もあれば、次の瞬間には荘厳な高みにご自分を引き上げ、完全な神を体現することもおできになります！ 目はずっと遠くを見つめたまま、スワミはこうおっしゃいました。

「人々には好きなように言わせておきなさい。彼らはわかっていないのです。私が両手をパンと叩きさえすれば、このマンディール全体が建ちます。一切はこの両手の中にあるのです」

その宣言は大きな声でなされたため、私たちにも聞こえました。その宣言は非常に力強かったので、私たちはゾクッと身震いしました。想像してみてください。スワミは私たちをまったく必要とされていないのです。私たちは自分がスワミの仕事をしていると考えています。実際には、スワミが私たちを通してその仕事をされ、私たちに達成感を与えてくださっているに過ぎません。スワミは私たちにマンディールを建設したという満足感を与えるため、そうさせてくださっただけなのです。



それから、スワミは次のように繰り返されました。

「私はすべてを持っています。一切は私の両手の中にあります」

スワミはその時、そこに立っていたすべての人たちから切り離されているかのように思われました。そしてスワミはその場を立ち去り、ゆっくりお部屋へ戻って行かれました。この出来事は、私に途方もなく大きな感銘を与えました。

以前、あなたは学生たちに、スワミがハワード・マーフェット氏とのインタビューの中で別の重大な宣言をされたと話してくださいましたね。あなたが通訳なさっていたインタビューです。覚えていらっしゃいますか？

もちろんです。あれはもう一つの重大な出来事でした。スワミがああとき口にされた幾つかの言葉によって、小さなインタビュールームがその外観を失い、宇宙と同じくらいの広い空間になりました。ハワード・マーフェット氏はこう質問したのです。

「スワミ、あなたはシルディ ババとして化身され、今はその神の8年後の化身

です。スワミ、あなたはその空白の8年間、どこにいらっしゃったのですか？」

スワミはお答えになりました。

「私は、一つひとつすべての原子に至るまで、この全宇宙に充満していました。私には一つの場所などありません。私は全宇宙です」

スワミの御言葉がかくも厳粛なものだったので、私はその答を通訳するのに二の足を踏みました。これは、私が体験した中で最も重要な出来事の一つでした。

先生、スワミはあなたにシルディ サイ ババの化身であることを明かされたことはありましたか？

私個人に対してはありません。でも 1954 年に新マンディールで、時おりババ様は帰依者たちの大きなグループを前に、この深遠な宣言をなさいました。当時はまだ公開の御講話はなかったのです。通常、ババ様は帰依者たちの小グループを呼んでお話しになり、霊的真理の貴重な宝石を与えてくださいました。

ババ様を信奉する年長のブラフミン（バラモン階級）の女性がいました。その女性がババ様に抱いていた率直な愛が見て取れました。彼女は正統派のブラフミンでした。お名前はジャナカンマ女史です。彼女はエーカーダシー ヴラタ〔ヒンドゥー教徒の断食日の誓い〕を厳格に守っており、その日は一滴の水さえ飲みませんでした。ある日、彼女がエーカーダシー ヴラタを守っていると、ババ様がお尋ねになりました。

「エーカーダシーの日の夕方、あなたは何をされるのですか？」

彼女は寺院へ参拝し、プラーナ〔古伝説〕の朗唱を聴聞していると答えました。ババ様はおっしゃいました。

「なるほど、あなたはエーカーダシーの日にプラーナを聴くのですね。では、今日は私がプラーナを聞かせてあげましょう」

あなたのご質問は、ババ様がシルディ ババだったと明言されたのを私が聞いたことがあるかどうかでしたね。その日ババ様は聴衆に向かってお話をされました。テーブルが持ち込まれ、目の前にマイクが置かれると、ババ様は力強くテーブルをドンと叩いて、こうおっしゃいました。



「私はヴェーダです！ 私は聖典です！ 私は神です！ あなたに差し出されたこのチャンスを受け取りなさい。ここで言われたことを理解しなさい。あら探しをしたり、批判したりしてはなりません。自分自身を解放するためのこの機会を失わないようにしなさい」



ババ様はこれをととても権威ある声でおっしゃったので、その声はマンディール中に響き渡り、すべての人に深い感銘を与えました。もちろん、私たちはババ様が神であることを知っているのですが、公然とそのことを言明されたことはなかったのです。そのとき、ババ様はテーブルをドンと叩いておっしゃいました。

「私は神です」と！ 忘れることはできません。大群集の前で公然とバガヴァンがそうおっしゃったのも、テーブルを叩きながらおっしゃったのも、その時が初めてでした。だれにそんなことが言えますか？ もし私やあなたが立ち上がり、群集の目の前で、「私は聖典です！ 私はヴェーダです！」と言え、石を投げられるでしょう。その日、私たちは皆、啞然としていました。ただバガヴァンを見つめ、目の前で燦然と光り輝く神性に仰天することしかできなかったのです。

聖母イーシュワランマ様や、イーシュワランマ様と彼女の神聖な息子との関係についての思い出はありますか？

私は聖母イーシュワランマ様と大変親しくさせていただきました。イーシュワランマ様とそのような絆を持てたことは幸運でした。私はそれを神の恩寵だと感じています。スワミはプラシャーンティ・ニラヤムの中にイーシュワランマ様のお部屋を与えられていました。彼女はいつでもスワミのお部屋へ上がる自由を与えられていた唯一のお方でした。それはスワミのお父様でさえできませんでした。スワミはお母様の願いを何でも叶えてあげていらっしゃいました。それを見るのは実に素晴らしいことでした。

スワミはいつも食事に関しては難しいお方でした。ほとんどお食べにならないのです。ですから時おりスワミがお許しになれば、スワミの姉妹の方々が調理して、村からお食事を運んできていました。

スワミはそれらが無邪気に避けておられました。出された食物を召し上ながら

ないのです！食卓について料理を召し上がるということはありませんでした。たとえ来て数秒間食卓につかれても、ほとんど何も召し上がらずに、お皿をあっちの端に押しやったり、こっちの端に押しやったりされるので、姉妹方はスワミをなだめるのに疲れ果て、母のイーシュワランマ様を連れて来られたものでした。イーシュワランマ様は、

「スワミ、ティンヌ スワミ、エントウク スワミ ニーヴ ティンナヴ？（スワミ、お食べなさい、スワミ、どうして食べないのですか、スワミ？）」とおっしゃり、ありったけの母の愛情でスワミを優しく説得し、やっとスワミはほんの少しお召し上がりになるのでした。

スワミは聖母イーシュワランマ様を喜ばせ続けられました。スワミは美しいサリーの数々を購入して、部屋中にそれらを全部広げ、お母様を招いて、「ラ エミ カヴァリ ティースコ（来て、どれでもあなたの好きなものを取りなさい）」とおっしゃっていました。イーシュワランマ様はどれでも自分のほしいサリーをもらうことができたのです。スワミは彼女に宝飾品も与えていらっしゃいました。お母様を幸せにするためなら、スワミは何でもなさっていました。私の考えでは、神はこの神の体を与えてくれたお母様に恩義があったのではないかと思います。スワミは「私の人生が私のメッセージです」とおっしゃっています。おそらくスワミは、私たちが自分の母親をそれと同じように大切に敬うように、教えてくださっていたのだと思います。

スワミはお父様のことも尊敬されていました。お父様は素晴らしい方で、私はお父様も存じ上げていました。もちろん、お父様はテルグ語を話すことはできましたが、他の言語を話すことはできませんでした。お父様は食料雑貨店を営み、帰依者たちのためにココナッツやプージャー用の品々をこまめに調達なさっていました。私の父はあまりテルグ語を知らなかったのですが、スワミのお父様のことが大好きで、二人はどのようなわけか意思疎通し合っていました。

私たちがスワミのお父様の御足に触れると、彼はとても謙虚におっしゃいました。

「なぜ、あなた方は私の足に触れるんだね？」

「あなたがアヴァター（神の化身）のお父様だからです」と、私たちは答えました。するとお父様はこうおっしゃったものです。

「私にはわからない。彼は偉大だ。彼は皆のためにいる。彼はもう私の息子で



はないんだよ」 お父様は素朴な方で、このように気取らずにお話になったものでした。

バガヴァンの物語は果てしなく続き、その規模も無限大です。人間にはそれらの多種多様さを余すことなく述べることはできません。この辺りで止めなくてはなりません、最後に一つ質問があります。サイの信仰仲間のニューカマー（新規参入者）に向けたメッセージは何でしょうか？

信仰を持ってください。揺るぎない信仰です。マインド（思考する心）の気紛れを止めるのです。人間のマインドは非常に限られたものです。マインドから論理的思考を止めてください。信仰を持って、サイ ババが神であることを受け入れてください。そうすれば、毎日あなたがどれほど至福を楽しんでいるか、あなたの人格がどれほど向上しているかがわかるでしょう。何一つ悪いものがあなたに影響を及ぼすことはありません。あなたは容易に神聖至福の岸へ渡ることができます。

ラジオ・サイ・グローバル・ハーモニーをお聞きのリスナーの皆さんに、バガヴァンの神性に関する豊富な体験の数々をお話しいただき、ありがとうございました。今日、先生がここへおいでくださったことは神の恩寵でした。

サイ ラム

ありがとう、ラジェーシュワリーさん。サイ ラム

出典：『サナータナ・サーラティ』2011年1月号

ラジオ・サイ・H2Hスペシャルより抜粋

http://media.radiosai.org/journals/Vol_06/01FEB08/14-h2h_special.htm